

## 海女の語りからみる宗教観に関する一考察

藤 喜 一 樹

### 1 はじめに

現代の日本人の七割が無信仰・無宗教を自認する。しかし、新聞社による各種調査によると、戦後は七割の人々が信仰有りと回答していた(石井 2007: 4頁)。

初詣を含めた日本における宗教的年中行事の実施率は、小谷みどり(2007)によれば、以下のようにになっている。初詣 76.4%、バレンタイン 35.1%、花祭り 2.6%、お彼岸 11.8%、お盆 74.0%、クリスマス 63.2%、この調査結果から、初詣、お彼岸、お盆、クリスマスは半数以上の人によって行われており、多くの宗教的年中行事が日本に定着していることが分かる(小谷 2007)。

日本人は、正月は初詣に神道の神社に参り、葬式は仏教の寺院で行い、結婚式はキリスト教の教会で行って平気であるというものである。日本人の多くが、神道、仏教、キリスト教、その他の諸宗教の区別なく、時の必要に応じて使い分け、利用していることが認められる。それは、日本人が宗教に特別のこだわりをもっていないことを示すものである(櫻井 2003: 58 - 59頁)。

NHK 放送文化研究所が国際比較調査グループ(ISSP)の一員として、2018年10月から11月にかけて実施した「宗教」に関する調査の結果について以下のように報告されている。①信仰している宗教の割合は変わら

ないものの、信仰心は薄くなり、神仏を拝む頻度は低くなっている。②日本人の伝統的な価値観だと捉えられてきた“お天道様が見ている”“人知を超えた力の存在”“自然に宿る神”といった感覚を持つ人は少なくなっている。③宗教に「癒し」などの役割を期待する人は減少している。宗教に危険性を感じる人は、感じない人よりも多い(小林 2019)。

また林(2010)の「現代日本人にとっての信仰の有無と宗教的な心」による統計調査によれば、日本の特徴とされてきた「信仰はなくても宗教的な心を大切に思う」人も減少している。“宗教的な心大切に”の減少は信仰の減少につながっていると指摘している。

以上の論考からみても現在の多くの日本人にとって宗教行為は、単なる習慣や国民のイベントとしておこなわれている傾向がみられる。実際国勢調査によると、産業別就業割合の推移で1950年当時48.5%であった第1次産業が2015年には4%である。かつての第1次産業では労働が自然現象に影響された為、宗教的な意識が芽生えることが多かったものと考えられる。そのため、現在、第1次産業の曲型的な従事者である海女を取りあげることによって、海女独自の宗教観がどのような因果関係のもとで形成され、海女特有の宗教観はどのようなものであるのか、こうしたメカニズムを明らかにしていきたい。



図1 協同作業を行う海女さん達

出典：新井圭織氏より提供

## 2 海女を取り巻く環境と調査の方法

海女とは、海に潜ってアワビやサザエなどの海の幸をとる仕事である。志摩半島の海女には、舟人と徒人がある。舟人(ふなど)とは、重いオモリを持って急速に潜水し、浮上する時には腰に縛った命綱を船上の夫が巻き上げる。徒人(かちど)との違いは、水深10～15メートルくらいまでの深いところまで潜る。徒人(かちど)とは、自力で潜水し浮上するため5～8メートルの比較的浅い磯で獲物を捜す。ふつうは陸(おか)からそれぞれが泳いで漁場へでるが、漁場が遠い地区では船に乗り合って沖へでるところもある(石原・前田 2009)<sup>(1)</sup>。

対象地域の概要として、鳥羽市答志は市内の中でも離れ島である。鳥羽市内の中心部への通勤・通学には巡行船が使われている。鳥羽市石鏡、国崎では小さな路地が多くあって、家が密集している。昭和48年にパールロードが出来るまで、巡行船で往復していた。国崎では沖合1km、幅4kmにわたってアワビ

が獲れる。鳥羽市相差は漁業と、農業と、観光の町であるが、相差の南側にはリアス式海岸が広がっている。志摩市志島は崖が多く、崖に多くの家が密集している。

海女の就業人口は、2007年(平成19年)の時点で、三重県鳥羽市が601人、志摩市が480人となっている。海女は、2007年時点で鳥羽市相差町が140人、鳥羽市石鏡町が87人、鳥羽市答志町答志が76人、鳥羽市国崎町が60人、志摩市志島が17人である<sup>(2)</sup>。(下村・石原 2014)は、全国の18県に海女がいるが、これほど海女の祭りの盛んな県はないと言う。三重県の現状であるが、ほとんどの海女の祭りは彼女ら以外には、知られていないと説明する。

これまでの民俗学、社会学の調査を整理すると昭和の時代の調査結果では、鳥羽市石鏡の(坂野 1980)の研究、鳥羽市国崎の(野村 1978)、(安藤 1980)、(牧野編 1994)(酒井 2011)の研究があげられる。しかし、これらの研究で示されてきた慣習、伝統行事、社会の制度の中には、現在、消滅したり縮小

したものも少なくない。

昨今の調査では、鳥羽市石鏡、国崎、相差を対象とした（山本 2013）の報告書があげられる。しかしこの報告書の中で示された伝統行事の中には、現在消滅しているものもある。そのため、伝統行事と密接に関わってきた海女の宗教観が、現在どのような状態にあるのであろうか。

そこで本稿では、海女さん 14 人、元海女さん 1 人、合計 15 人から聞き取り調査の協力を得た。鳥羽市内では、答志 A さん、石鏡 A さん、石鏡 B さん、石鏡 C さん、国崎 A さん、国崎 B さん、国崎 C さん、相差 A さん、相差 B さん、相差 C さん、相差 D さん、相差 E さん、志摩市内では元海女の志島 A さん、志島 B さん、志島 C さんである<sup>③</sup>。聞き取り調査は 2016 年 9 月から、2020 年 7 月にかけて実施した。性別ではすべて女性であり、年齢別では、80 歳代 1 人、70 歳代 6 人、60 歳代 2 人、50 歳代 1 人、40 歳代 2 人、30 歳代 2 人、20 歳代 1 人である。研究の方法

として、基本的には、海女さんの考えや経験を収集するためにインタビュー調査による質的調査をとった。

### 3 海女になったきっかけについて

#### 1 海女になったきっかけ⇒

答志 A さん（昭和 38 年生まれ）

結婚して子供ができた。パートに行きたい。3 時間労働。33 歳で、パートで入りたての海女。遊びから生まれる海女漁、小さい頃は気づきませんでした。塩が引く時、ウェットスーツを借りてヒジキ獲り。私たちの小さい頃、磯場がたくさんありました。歩いて行けるところに海水場があったんです。自然に感謝。全部港になってしまったんです。走って海に飛び込んでいたのですから。小さい頃は気づかなかったものですが、今とは育ってきた環境が違います。船をとめる為、港が必要。船が大きくなり、出航口が増えました。船を持つと、漁に出る日数が増えます。埋め立て、



図 2 アワビを見せ微笑む海女さん達  
出典：新井圭織氏より提供

港を大きくすると、磯場がなくなっていきます。海岸線がなくなっていきました。ワカメ漁ができないくらい海岸（磯場）が遠くなっています。子供達、海に接する機会が無くなってきました。船で行かないと磯場には行けません。現在、遠浅、海の中で目をあけてはいられません。油が浮いている。ヘドロ状態。遊びにいくところは親が監視しなければならぬんです。子供には塾がありますし、クラブがあります。おばあちゃんに子供を見てもらうことになるんです。ゲームをあたえて、同じ年代の子に遊んでもらうのです。段々海で遊ぶ機会が無くなっていると思いますね。

## 2 海女になったきっかけ⇒

石鏡 A さん（昭和 23 年生まれ）

15 歳の時、伊豆方面へ出稼ぎに行きました。熊野方面に出稼ぎに行く人もいました。海女になる人半分、就職半分、昭和 10 年代生まれの地元の方は、海女さんばかり。都会への憧れも少しはありましたけど。母親が家におってくれと言っていたんです。母親が家においておきたかったんです。最初から家を継ぐつもり、海女さんになるものやと思っていたということですが、伊豆ばかりではなく、熊野方面へも出稼ぎに行ったりしながら、この土地の海女さんの出稼ぎ、夏の間、熊野、伊豆に行くわけです。私はお父さんと一緒に行ったんですが、4 月から 10 月まで、出稼ぎのところにいたものでした。11 月、12 月は地元でナマコ獲り。出稼ぎは 15 歳から 27 歳までしていました。20 歳の時、長男が生まれて、1 年間は家にいました。結婚してからも出稼ぎには行っていません。

## 3 海女になったきっかけ⇒

石鏡 B さん（昭和 18 年生まれ）

国崎出身で石鏡に来たんですわ。結婚まで国崎で家の手伝いをし、食べさせてもらっていたんです。昭和 38 年、20 歳で結婚し、本

格的な海女になったのですが。姑さんも海女、主人は、船で 7、8 人の海女を乗せていたんですから。

## 4 海女になったきっかけ⇒

石鏡 C さん（昭和 16 年生まれ）

石鏡生まれ、嫁には 20 歳の時に。結婚と同時に海女さんの稽古に、伊豆、熱海に出稼ぎ半年。熊野、伊豆、皆違うところに行ったのです。出稼ぎには 20 人から 30 人の規模で行ったけどね。

## 5 海女になったきっかけ⇒

国崎 A さん（昭和 26 年生まれ）

海女デビューは 16 歳の時。出稼ぎの合間に海女の仕事ということで。大阪羽曳野へは 3 月、4 月、5 月イチゴの季節、出稼ぎ、嫁ぐまで家の家計を助けたということ。19 歳で大工さんと結婚して、5 人兄弟、女性 2 人のうち、私 1 人が海女さんに。

## 6 海女になったきっかけ⇒

国崎 B さん（昭和 21 年生まれ）

海女デビューは 19 歳、19 歳の時、漁師・船大工と結婚したけど。檀那が船を持っており、降ろしてくれるのですから。アワビを獲り、家計のたしにしたけどね。

## 7 海女になったきっかけ⇒

国崎 C さん（昭和 19 年生まれ）

海女デビューは 15 歳、19 歳で会社員と結婚。家計のたしにしたなあ。

## 8 海女になったきっかけ⇒

相差 A さん（昭和 26 年生まれ）

相差で生まれ、相差で育ち、学校を卒業してからは兵庫県で観光海女として働いていました。20 歳の時に結婚し、21 歳の時に本格的な徒人海女になりました。子供の頃、親の姿をみてきたことに影響を受けたと思いま

す。

#### 9 海女になったきっかけ⇒

相差 B さん（昭和 22 年生まれ）

学校を出てからは兵庫県で観光海女として働き、20 歳で帰郷して結婚。本格的に海女漁をするようになったんです。

#### 10 海女になったきっかけ⇒

相差 C さん（昭和 49 年生まれ）

小さい頃、鳥羽駅周辺で過ごした。海女さんになることは、最初、家族の反対があったのです。14 年前、近所の人につれてもらった。これまで潜ることはありませんでした。鼻血が出ることはありました。泳ぎは、元々得意です。

#### 11 海女になったきっかけ⇒

相差 D さん（昭和 54 年生まれ）

1 度県外を出ましたが、2016 年に始めたばかりの頃は、浅い磯のところで顔をつけるのが精いっぱい。足が届かないような深さは絶対に無理でした。最初は漁師の主人に付いてもらって、父ちゃんがおるんやったら、大丈夫。もうちょっと深いところ行ってみようって、少しずつですね。

#### 12 海女になったきっかけ⇒

相差 E さん（昭和 60 年生まれ）

海は生まれた時から生活の中にあります。1 度県外に出たんですけど、時間ができて、どうしようかなと。ばあちゃんの道具があったというのも、大きいかな。

#### 13 海女になったきっかけ⇒

志島 A さん（昭和 12 年生まれ）

志島で生まれ、育ち、小学生の時は海で遊んでいたのや。20 歳で結婚し、23 歳の時、海女になったのやから。

#### 14 海女になったきっかけ⇒

志島 B さん（昭和 59 年生まれ）

2013 年 2 月の頃、大阪であった漁師の就行フェアに参加し、7 月に、最初の体験をしました。2014 年から大阪から移住していません。

#### 15 海女になったきっかけ⇒

志島 C さん（平成 4 年生まれ）

海とは関係のない奈良で育ちましたが、海にもぐるのが好きで、最初、鳥羽で仕事を探していました。

以上の語りから、高齢者ほど若い頃から身近な環境に海があり、小さい頃から海に関わり、自然と海女になる環境が整えられていたことが分かる。現在、海女の担い手として、志島の B さんや、志島の C さんのように外部から海に潜る事に憧れて就業している海女さんがいる。志島のように外部に開かれた漁協もある。相差の C さんのように結婚がきっかけで、相差の土地に来てから海女さんになる人や、D さんや E さんのように一度相差を離れてから、戻ってきて海女さんになる人もいる。若い世代、20 歳代から 40 歳代までの海女さんには、海女のなり方に多様性がある。これまで海とは関係なく生活してきた者が強い意思を持って海女になるのも、まだ数としては少ないが新しい傾向とみなせる。

## 4 小さい頃の体験について

### 1 小さい頃の体験⇒

答志 A さん（昭和 38 年生まれ）

あかべんとり、海の中で採るわけです。子供は、砂あそびとして届かないところへ投げます。岩場、波が高く、潜りも覚えていくんです。泳ぎも覚えていきます。見よう見まねで貝を獲るのです。ウニを獲り、海岸の近くで、塩水で炊きます。ウニ、自分たちで

食べます。おやつにもなったものです。お客さまが200円とか500円とかで売ってといい、どうぞと渡したのです。自分達で貯めたお金でお菓子を買ひ、海の物は売れると意識していたんです。小学校の低学年の頃サザエをとり、小学校の5年でアワビをとりましたね。初めてとった時、家の人が喜んでくれたなあーという思い出があります。遊びの中から海水を見ていました。中学になるとクラブがある。1度海を覚えても、中学、高校とクラブがあり、海では遊ばなくなりましたね。海女漁、クラブのおかげでなくなりましたね。

### 3 小さい頃の体験⇒

石鏡 B さん (昭和 18 年生まれ)

小学校 5 年生の時、アワビを獲る為にもぐりましたわ。夏休み、アワビ獲り、籠一杯になり、家族に喜ばれましたね。子供の頃の積み重ねは大きいです。けど昔と今とでは磯場が違いますね。

### 5 小さい頃の体験⇒

国崎 A さん (昭和 26 年生まれ)

小学校の夏休み、磯へ遊びに。子供の遊びは、アワビ獲りしかなかったかな。誰にも獲り方は教えてもらえなかった。下手な人は下手な人なりに。上手い人は上手い人なりに。けれど、昔はアワビがようけおった。子供でも獲れた。1 時間半で 1 つか 2 つ。怖い目をしたことがあるものや。大なり小なり、皆、怖い目をしているという事。

### 8 小さい頃の体験⇒

相差 A さん (昭和 26 年生まれ)

小学校 5、6 年生の時、アワビ、コブシの貝を海の奥に投げ、遠くに泳ぎに行ったものですわ。冬場は心臓に負担、家族にとめられたものでした。最初の頃、耳が痛く、耳栓を入れていたんです。

### 12 小さい頃の体験⇒

相差 E さん (昭和 60 年生まれ)

海女さんになると思っていましたし、海に落としたものを拾いにいってました。ゴムボートで行き、とってこいとやった記憶もあるんです。

### 13 小さい頃の体験⇒

志島 A さん (昭和 12 年生まれ)

小学生の時、海に遊びに行き泳いだのや。堤防から飛びこみ、海の好きな子と嫌いな子に分れたものや。

小さい頃の体験として、遊びが、後々海女さんになるための最初の職業訓練になっていることが理解できる。小さい頃の海での遊びが、自然と海女漁に向かわせていったのは自然な事であったと考えられる。しかし一方では、小さい頃、海での遊びが嫌いだった者は、15 歳中学校の卒業時、または高校の卒業時、海女の道を選択しなかったと考えられる。今の時代は昔のように、親の方から海女漁の練習をする為の十分な自然環境を子供が小さい頃に提供できなくなっている。そうしたことから母親や祖母が海女であっても、子供達の適性を試す場所が無くなってきている。第一次産業の跡を継ぐ者にとって、小さい頃の環境は大きな影響を与えていたことが分かる。

## 5 海女さんの危険体験について

### 1 海女さんの危険体験⇒

答志 A さん (昭和 38 年生まれ)

潮の流れが速い時、下手をすれば命を落とします。速い潮が底まで行き、潮で流され、恐怖を味わった経験があります。自分で船までたどりつくのに必死だったんです。慣れてくると、油断して潮で流されてしまうということもあるんです。若い時はできても、体力

がなくなってきたら、潮が大変な状態になれば、自然に逆らうと命を落とすこともあるのだと認識しています。

## 2 海女さんの危険体験⇒

石鏡 A さん（昭和 23 年生まれ）

これまで岩の中で手が抜けなくなり、亡くなった海女さんがいたんです。人工呼吸しなければならぬ海女さんもいたのですよ。私達海女は、危ないところには行かないという習慣が身についています。風邪をひいたら絶対ダメ。海で足をつるから。体調が悪い時ほど、深いところほど大変だと。海女漁に行ってもあかん一という時は分かっています。

## 3 海女さんの危険体験⇒

石鏡 B さん（昭和 18 年生まれ）

深いところから戻れなく、死ぬこともあるのです。体の調子が悪い時、自分でも分かっています。もしもの事があれば、村方に迷惑をかけますし、心臓が悪いと亡くなることもあるので、他人事ではありません。

## 4 海女さんの危険体験⇒

石鏡 C さん（昭和 16 年生まれ）

沖を見ると風の流れが見え、海の荒さ、風の向きを見ることができます。東側からの風が荒い時、海の潮の流れが速い時などは、漁にはでれないということが分かっていますね。ただ今日はどう、明日はどうかとは深くは考えませんね。

## 5 海女さんの危険体験⇒

国崎 A さん（昭和 26 年生まれ）

海女漁は自分なりに泳いでいき、潮の流れが速い時はおもりが利かないし、体力がいののですから、大なり小なり、皆、怖い目をしています。釣りをしに来ている人のテグス（釣り糸）に引っかかることが一番怖いですが、岩場で、ナイロンのテグスに引っかかる

ことも避けたいことです。釣り人が後始末をせずテグスが残り、特に息苦しくなるとテグスが分からず、その時、海女が引っ掛かるわけです。こうした事は、潮の流れより怖く、海女は、釣り人が来ている時には、特に注意喚起をしているのです。

## 6 海女さんの危険体験⇒

国崎 B さん（昭和 21 年生まれ）

テグスは透明で見えにくいし、釣り人の中には、海女の頭の上に餌を投げる人もいますのでから。

## 7 海女さんの危険体験⇒

国崎 C さん（昭和 19 年生まれ）

テグスが一番怖いし、切れないので心配です。海女漁の時は、ハサミも持っていないのですから不安に変わりがありません。

## 8 海女さんの危険体験⇒

相差 A さん（昭和 26 年生まれ）

10 年以上前、離れ島でヒモを巻いていたんですが、あがって来ない海女がいたんです。その海女さんは沈んでいたのです。その後救出され、植物人間になってしまったんです。アワビは暗いところにおり、眺めている時に波が来て、危険な目をした事があります。自分の体が疲れている時は浅いところしか潜りませんし、体がしんどい時は、潜りたくない時があります。皆が、自分で手加減していると思いますね。

## 9 海女さんの危険体験⇒

相差 B さん（昭和 22 年生まれ）

これまで相差では 7 人の海女さんが亡くなっています。心臓麻痺で亡くなった海女が 3 人、底引き網に引っ掛かって亡くなった海女が 1 人、岩場でヒモが引っ掛かって亡くなった海女が 1 人、それ以外おぼれて亡くなった海女が 2 人います。海の中では、タン

ポのヒモをはずしています。岩場や海藻で引っ掛かることが現実にあるからです。これまでヒモが2回、引っ掛かったことがあります。ヒモなして体一つであれば、引っ掛からないし、海では死にたくない為、用心します。最初、息いっぱい余裕でも、息が苦しくなってきた、ヒモが引っ掛かれば、ものすごく時間がかかります。無我夢中であらなければならぬ時の事も考えて、ヒモをはずしておくことは大事な事なんです。

#### 10 海女さんの危険体験⇒

相差 C さん (昭和 49 年生まれ)

以前、ナマコを獲る時、網がほってあったんです。夢中になるとそちらに行き、知らんで行っていると、引っ掛かります。底引き網が危なく、磯のいたるところに、底引き網が放置されているのです。深い場所や、潮の流れによって、網のある場所が分からない時があるんです。そうした事から、漁協組合の方からも注意喚起をしてもらっています。これまで船に引かれそうになった事もありましたので。1人の時、船が前を通っていきましたが、真上で船の音が聞こえたら怖く、船の方は気づいていなかったんです。船が通りすぎるまで待っていました。

#### 11 海女さんの危険体験⇒

相差 D さん (昭和 54 年生まれ)

ウェイトスーツのベルト、海藻に絡まり、お一つとなる。タコが怖いし、負けそうで必至になります。無理はしないし、無理にはいきません。

#### 12 海女さんの危険体験⇒

相差 E さん (昭和 60 年生まれ)

潮の流れが変わり、行きはよいよい、帰りは怖いという気持ち。流れが速いとすぐには帰ってこれません。流れが速いと心が動揺します。潮の流れを見て追い風で沖までいって

いましたが、急に流れが変わりました。晴れの日には問題がありませんが、天気が悪くと潮の流れが変わります。いち早く察知し、ルートを変えました。

#### 13 海女さんの危険体験⇒

志島 A さん (昭和 12 年生まれ)

危険な体験は 34 歳の時、波が荒れてきて、急いで 5 人が船に乗ったんや。男の人が一人、船頭であるトマイがおり、天候を見るのが上手であり、命が助かったんや。これまで志島で亡くなった海女は 2 人おる。海女はトマイに命を預けており、トマイがいるから安心してのや。トマイは毎日天候を見てくれる。海が荒れている時は、朝、浜の真ん中に赤い旗を立ててくれるのや。

#### 14 海女さんの危険体験⇒

志島 B さん (昭和 59 年生まれ)

一回波に巻き込まれたことがありました。海で足がつり、その時は大変ではなかったです。崖から手が抜けなかった時は、時間を忘れていました。

#### 15 海女さんの危険体験⇒

志島 C さん (平成 4 年生まれ)

ウツボにかまれ、4 針縫うたことがあります。海に潜る時はいつも慎重にしています。

海女さんの危険体験として、海女漁を仕事にするということは、いつも危険と隣り合わせにあることが理解できる。少しでも気を抜けば命にかかわるからである。海女にとって新しく手さぐりして漁を積み重ねていくことは、経験上とても大切な事である。けれども海女にとって無理な行動を慎むことや、体調がすぐれない時は行動を自制することも大切な事であることが理解できる。海女にとって、日々変化に富む気象への対応をしていくことは仕事であろう。また海女がとる緊急時



のとっさの判断と決断は、体験による経験値から導かれていくものであると考えられる。

## 6 海女の信仰心について

### 1 海女の信仰心⇒

答志 A さん（昭和 38 年生まれ）

島の色々な行事があり、自然と手を合すんです。沖へ出る時も必ず手を合しますね。先人のやってきたことが少しずつ理解できるようになってきたんです。自然にはさかわらないし、自然をなめていると命を落とします。船に乗っている時は、海に先に食べ物を食べていただくのです。人間を引っ張りにくるといけないから、海に先に食べ物を播くのです。

### 2 海女の信仰心⇒

石鏡 A さん（昭和 23 年生まれ）

人間の心は、先祖さんあってこそ私の私だと思っています。何とはなしにご先祖さまが見守ってくれています。今も、父さんが天から案じてくれていますから。毎朝、仏さまには、ご飯 6 つ、お茶を上げ、線香を立てます。ご飯は毎日替えています。お供えは度々替え、毎日変わった物があれば、お供えをしていますね。石鏡では、青峰山に海女さん全員がそろって一年に一回はお参りをしています。年の初め、2 月 18 日には、石鏡の海女さんが個々で青峰山へ行き、事故のないように、まめ息災でいさせてくださいという意味のお参りで、お願いしますという気持ちで拜んでいます。中参宮は 7 月 10 日で、石鏡の海女さん 60 人程が青峰山へ行き、中祝いで、アズキもちをあげます。海女さん皆で歌を歌い、楽しませてくださいという気持ちから参拝に行きます。年の終わり、12 月 25 日以降には、石鏡の海女さんが個々で青峰山へ行き、1 年間無事にすごせ、有難うございましたという気持ちで拜みに行っています。

### 3 海女の信仰心⇒

石鏡 B さん（昭和 18 年生まれ）

漁業組合の近くにある六地藏さんに、三日に一回は拜みに行きます。お酒とお米のお供えをし、六地藏への祈祷は海女にとっては大切なものだと思っていますから。

### 4 海女の信仰心⇒

石鏡 C さん（昭和 16 年生まれ）

石鏡から見ることでできる島の岩に穴が空いており、朝日を拜んでいます。今日はどう、明日はどうかとは考えません。

### 5 海女の信仰心⇒

国崎 A さん（昭和 26 年生まれ）

海の神様へは、度々参ります。国崎には海士潜女（あまかづき）神社がありますから。ここでは潜女神（かづきめのかみ）が祭られているんですよ。2 月には安全祈願祭があり、赤飯を炊き、お供えとして赤飯を供えます。神社へ参った後、海へも参ります。現役の海女さんや引退した海女さん全員を含め、村中の参加があります。

### 6 海女の信仰心⇒

国崎 B さん（昭和 21 年生まれ）

私も、海の神様へは度々参りますから。

### 7 海女の信仰心⇒

国崎 C さん（昭和 19 年生まれ）

私も、海の神様へは、度々参ります。

### 8 海女の信仰心⇒

相差 A さん（昭和 26 年生まれ）

年に 3 回は、海と青峰山、石神さんへ個人でお参りに行っています。浜にはお酒とアズキと米を持ってお参りに行っています。石神さんへのお参りは 50 年前から続けています。1 月 25 日には、潮干まちで、今年のはじまりで、安全に海女をさせていただきますと拜みま

す。

9月25日には、夏磯のお礼と、冬磯が無事やっけていけますようにと拝み、おはらいを受けます。12月25日には、冬磯、10月から12月27日までの磯を無事にやっけてくることのできて、有難うございましたという気持ちで拝んでいます。気持ちの問題で、お参りしないと気になりますんで。

## 9 海女の信仰心⇒

相差Bさん(昭和22年生まれ)

仏さまへのお供えは、毎日、お茶とご飯をあげています。ご先祖さま見守ってください。大漁させてくださいとの思いをこめて拝んでいます。水中メガネのひもには、青峰山の御守りを手で括っています。ウエットスーツには白で魔除けのドーマン、セーマンを入れています。ドーマンですが、神様見守ってください。安心して海に行かせてくださいという意味です。セーマンは、朝、海に行つて無事に戻つてくれますようにとの意味があります。

## 10 海女の信仰心⇒

相差Cさん(昭和49年生まれ)

毎朝、仏さまへお茶とご飯のお供えをします。カマドのお地蔵さんに水をかけ、お菓子をそえます。単車で行つて潜る前に、お地蔵さんのところでもお参りをします。毎回、無事に見守ってくださいとお参りをし、お参りをしないと気持ちが悪いんです。理由が分かり納得したことはしますが、理由が分からずに納得できないことはしません。

## 11 海女の信仰心⇒

相差Dさん(昭和54年生まれ)

ドーマン、セーマンのネックレスを身につけています。安心感、気休めになります。神だのみするのは、何かおこるといけないし、海の神様がいつも見ていてくれるから、自然

にそうなります。

## 12 海女の信仰心⇒

相差Eさん(昭和60年生まれ)

漁に出る時は、先祖さんへ、無事に帰つてこれるように願い、家の仏壇の前でチンと鐘をならします。毎日、夕方にはお地蔵さんに、無事に漁ができるようにと手を合せています。

## 13 海女の信仰心⇒

志島Aさん(昭和12年生まれ)

実家のばあさんに、小さい頃、ご先祖さまのことはおろそかにするなと教えられてきたんや。ご先祖さまのことをきちんとすれば、ご先祖さまは良いことを戻してくれると、小さい時に言い聞かされたのや。毎朝、自分のご飯を食べる前に、仏さんにご飯とお茶をあげ、しきびを替えるのや。こうした習慣は受け継がれてきたもので、命日には般若心経をあげているんや。海の仕事は危険性があるから信心を捨てることはないわ。

## 14 海女の信仰心⇒

志島Bさん(昭和59年生まれ)

海の神様がいると思う時があります。自然の大きい力になすすべがなく、祈るわけです。石経おろしもそういったことの一貫としてしています。

## 15 海女の信仰心⇒

志島Cさん(平成4年生まれ)

月に一回海の前で、安全祈願、豊漁を願い東西南北に石を並べ、手を合せお参りをします。そのさい、お米、かつおぶし、日本酒を捧げます。海に対しての祈願は、しといた方が安心感があるからしています。

15人の海女さんすべてにおいて信仰心が厚いことが理解できる。またどこの地域にい

る海女さんにとっても、年三回海の守り神として信仰の厚い青峰山正福寺にはお参りをし、御祓いを受ける。また海女さんの御守りである魔除けとしてのドーマンは神様が見ているから安心して海に行つてという意味である。一方セーマンは朝、海に行つ無事戻れるようにという意味である。

## 7 地域の風習について

### 1 地域の風習について⇒

答志 A さん（昭和 38 年生まれ）

正月前には実家にお礼に行き、鏡餅 2 つを持って行きます。正月の 4 日間、船の慰霊の為、船を持っている家は、浜辺でみかんを播き、家でもみかんを、播きます。1 月 1 日から 1 月 4 日は、神さま、仏さまへの祈願をします。神棚、床の間、部屋中に、しめなわを巻きます。同時にすすはらいを行います。1 月 21 日は、正月のしめあげで、般若心経をあげます。もちをつくり、のりづけにします。

### 2 地域の風習について⇒

石鏡 A さん（昭和 23 年生まれ）

正月のお供えは、浜、船、お地藏さん、祠にあげます。1 月 1 日は、アズキ御飯をあげます。1 月 2 日には、餅の上にアズキを盛り、それをあげます。仏さまへは、半紙の上にお餅を二重で 2 つあげ、お餅の上に細かいミカンを 1 つずつのせます。恵比須さまへは、半紙の上にお餅三重で 6 つあげ、お餅の上に細かいミカンを 1 つずつのせます。浜へは、半紙の上にお餅一重で 2 つあげ、お餅の上に細かいミカン 1 つずつのせます。正月 1 日、2 日のお供えは、イワシー匹、お神酒、ナマス、赤飯、うでた伊勢エビを一つの箱へ入れます。正月の迎えは、家の玄関にツバキを右 3 つ左 2 つ飾ります。玄関には、福の字の札を掲げ、札にはしめ縄を巻き、家の中、玄関、恵比須さま、仏さま、浜（三ヵ日）にも、しめ縄を

します。

### 3 地域の風習について⇒

石鏡 B さん（昭和 59 年生まれ）

念仏ばあさんのしきたりがなくなりましたから。皆がよって、誰もが村の中で念仏をする風習がなくなってしまいましたわ。2 月 15 日の御釈迦さんの日に、3 人のばあさんと念仏するくらいかな。

### 14 地域の風習について⇒

志島 B さん（昭和 59 年生まれ）

毎月 1 日には、お酒、米、かつおぶしを浜にそなえます。月の 3 日とか 5 日とかに小屋の皆でごちそうを食べます。青峰山へは 3 月 18 日、6 月 25 日、9 月 14 日に参ります。お盆は、ご先祖さんが海から来て海へ帰ると思っています。毎月 16 日には船を出したらあかんという言い伝えがあります。

### 15 地域の風習について⇒

志島 C さん（平成 4 年生まれ）

石経おらしは、皆がしているから。行事はなくなる限り、やっていた方が良くと思います。青峰山に参るのも、参らなければ海にもぐってはいけないという慣習があるからなんです。

お正月には海女さんが丁寧な儀礼をする地域も認められ、そこでは般若心経が唱えられる。けれども、地域によっては、海女さんが念仏の風習を維持しているとは限らない。しかし、現在でもなお、これらの地域では代表的な祭事が残されている。答志地区では 7 月中旬の小築海さんがある<sup>(4)</sup>。石鏡地区では 2 月 16 日の潜き下り（かずきおり）<sup>(5)</sup>、4 月 4 日の磯の下り合わせがある<sup>(6)</sup>。国崎地区では 1 月 17 日ののっと正月<sup>(7)</sup>、7 月 1 日の海士潜女神社例大祭がある<sup>(8)</sup>。相差地区では 5 月 7 日の石神さん春まつりがある<sup>(9)</sup>。志摩

市志島地区では3月18日の石経おらしがある<sup>(10)</sup>。小築海さんの八幡神、潜き下りと磯の下り合わせの八大龍神、海士潜女神社例大祭の潜女神、石神さん春まつりの神明神社(天照大神)と内の社の神武天皇の母、玉依姫命(たまよりのひめのみこと)、石経おらしの般若心経と地域毎に祭る対象は異なるが、地域毎の特性が残っている。

## 8 おわりに

海女になったきっかけでは15人中11人は地元生まれであるが、志島のケースのように県外で生まれ、就業している20代や30代の海女さんもいる。海女さんの担い手として、地元の間人が後継者として育てていく事が望ましいが、今後外部から担い手を導入しなければならない時期も来るのであろう。また小さい頃の体験として地元生まれ11人のうち6人は海で遊んだ記憶を回想するが、生まれ育った自然環境が地元の産業と密接に関わっていたことは現在では考えられない事である。

海女さんの危険体験について15人中15人が何らかの危機的な体験をしている。この事は海女自身が多く危険をはらんでいる自然と立ち向かう中で、海女自身の感性からより深い何か立ち上がってくるのであろう。これが海女の信仰心と関わっていることは紛れもない事実である。15人中15人が信仰というものを身近に意識しているからである。また地域の風習について特に正月の風習については、丁寧に準備している地域があることが分かる。一方、お念仏の風習については廃れているところが出て来ているといえよう。

本来日本人の宗教観は宮崎賢太郎が指摘するように日本の民俗宗教は重層信仰であり、先祖崇拜であり、現世利益信仰であり、儀礼中心の信仰である。これはキリスト教の一神教であり、唯一絶対神崇拜であり、来世志向

であり、教義中心であるのとは明らかに異なっている(宮崎 2014)。この日本の民俗宗教の原型にあてはまるのが今回調査の対象とした志摩半島の海女の宗教文化であり、海女の持っている宗教観は本来日本人が有していた日本の民俗宗教の原型であると考えられる。その意味で多くの日本人が第1次産業と関わりのない現在、日本人が初詣で神道、お盆と葬式は仏教、クリスマスとバレンタインはキリスト教と必要に応じて使い分けていて、特別のこだわりがなく単なる習慣や国民のイベントとして宗教行事を行っているのも日本の民俗宗教の原型とは明らかに異なっている。

従来海女さんが般若心経を身近で唱える風習を持っていたことが、今回の調査からもかいま見れたが、これは海女さんが身体で体験した生の事実から出発しており、既成の仏教の教義教理の枠組みや、硬直した言説から出発したものではない。教理・教義を中心とする現代の仏教は、人間としての原始的なエネルギーを呼び覚ます感覚的な身体的な世界を重視してこなかったのではないだろうか。多くの人にとって現代仏教の教理・教義は学問上の話で、自分にとってどのような意味があるのか認識されない時代である。

したがって、海女さんの語りからみた宗教観の一側面として、自然がはらんでいる危険との出会いがあり、生きて行くうえでの問いがまず存在するところに、信仰心の原点があるのだった。そして、海女独自の宗教観が今回調査した海女の語りから見ることができたのであった。これは多くの日本人が日々の自分自身の苦悩・葛藤を宗教に求めていかない現代社会からみれば独自の宗教文化を形成しているのである。

## 註

- (1)三重県教育委員会は、平成22～25年度にかけて、鳥羽、志摩で海女習俗の民俗調査を行った。その結果、民俗技術が県指定文化財にふさわしいとして、平成26年1月23日に、全国で初めて県無形民俗文化財に指定された。また、平成29年3月3日に、「鳥羽・志摩の海女技術」として国重要無形民俗文化財に指定された。(引用 三重県 教育委員会事務局 社会教育・文化財保護課 記念物・民俗文化財班 2015 「文化財としての海女漁の技術」)
- (2)海女の就業人口は、1949年(昭和24年)の時点で、6,109人、1978年(昭和53年)の時点で、3,603人、1997年(平成9年)で1,698人で2007年(平成19年)で1,081人で推移している。(引用 石原義剛・前田憲司 2009『目で見る 鳥羽・志摩の海女』海の博物館、36頁)
- (3)海女の年間操業日数は、2007年(平成19年)の場合、鳥羽市答志で14日、鳥羽市石鏡で51日、鳥羽市国崎で33日、鳥羽市相差で24日、志摩市志島で63日である。(引用 石原義剛・前田憲司 2009『目で見る 鳥羽・志摩の海女』海の博物館、34頁)
- (4)小築海(こづくみ)さんの祭典は、鳥羽市答志町で7月中旬に行われる。答志島から北東方向に約2.6キロ離れた小築海島周辺の磯場で海女漁が解禁になる日の行事である。小築海島での漁が始まる前には、八幡神社の宮司が祝詞をあげて大漁と安全を祈り、海にお神酒とお米を捧げる。神事が終わると、海女らは一斉に海へ入り、2時間程の操業でアワビやサザエを採る。その間に、漁協の世話人ら男衆は小築海島に生えるカヤとクワを刈りに行く。操業を終えた海女は、アワビやサザエを手にもつて八幡神社に供え、海の幸への感謝と安全を祈る。参拝を終えると、宮司からカヤとクワを受け取って持ち帰り、船や家の玄関に飾る。(引用 下村恵美・石原義剛 2014『海女、海神に願う 志摩半島の海女祭 - 祈り、魔除け-』海の博物館、3頁。)
- (5)潜き下り(かづきおり)の祭典は、鳥羽市石鏡町で2月16日に八大龍神の前で、新しい年の海女漁が始まる前に、八大龍神に操業において安全と大漁を祈る行事である。この日、石鏡漁協には八大龍神の掛け軸がかかり、その前に一対のアワビが供えられる。海女は家から干し柿と米を升に入れ、丸餅と酒、小石を持って龍神に供え、大漁を祈願する。(引用 下村恵美・石原義剛 2014『海女、海神に願う 志摩半島の海女祭 - 祈り、魔除け-』海の博物館、14頁。)
- (6)磯の下(お)り合わせの祭典は、鳥羽市石鏡町で4月4日に八大龍神の前で、アワビ漁の解禁直前に、海女漁の大漁と操業安全を祈願する行事である。2月16日にある「潜き下り」とほとんど同じだが、異なるのは、お供えする品が丸餅ではなく、ぼたもち(おはぎ)に代わることと、地元の圓照寺で受けたお札を髪の毛に結ぶことである。(引用 下村恵美・石原義剛 2014『海女、海神に願う 志摩半島の海女祭 - 祈り、魔除け-』海の博物館、15頁。)
- (7)のつと正月の祭典は、鳥羽市国崎町で、正月の終わりの日とされる1月17日に家内安全や海上安全、豊漁などを祈願し、正月の神をわら船に乗せ、火を付けて海へ送り出す行事である。各家では魔除けの言葉を記した「ツメの札」と洗米、赤飯、なます、お神酒、小銭を用意し、海女がそれらを持って前の浜に集まり、龍神に祈る。浜では町内会が用意したわらを使って、10人ほどの海女が長さ180センチ、幅100センチのわら舟を作る。わら舟には「歳徳丸」と書いたのぼりを立て、お神酒で浄めた後、波打ち際まで運んで火を付け、鈴の音を鳴らしながら海へ流す。(引用 下村恵美・石原義剛 2014『海女、海神に願う 志摩半島の海女祭 - 祈り、魔除け-』海の博物館、21頁。)
- (8)海士潜女(あまかづきめ)神社 例大祭の祭典は、鳥羽市国崎町で7月1日に行われる。二千年以上もの間、伊勢神宮へのしあわび献上を続けてきた先祖と豊かな資源を育む海へ感謝をささげる大祭である。大祭には伊勢神宮から舞姫や雅楽が参列し、神楽を奉納する。例大祭当日は、

- 海女漁は休み。国崎の海女は米と大豆、さい銭を持って神社に参拝する。(引用 下村恵美・石原義剛 2014『海女、海神に願う 志摩半島の海女祭 - 祈り、魔除け-』海の博物館、22頁。)
- (9)石神さん春まつりの祭典は、鳥羽市相差町で5月7日に行われる。神明神社の参道にある「石神さん」は海女の信仰が厚く、女性の願い事を叶えてくれると言われ、全国から女性の参拝者が多く訪れている。その石神さんで、海女の安息日である「磯日待ち」に大漁祈願と大願成就を祈願する。神事には白い磯着の海女が参列し、宮司のおはらいを受ける。神事の後にはこもり堂に移動し、男衆(おとこし)が日頃の労をねぎらい、手料理を振る舞って海女をもてなす。(引用 下村恵美・石原義剛 2014『海女、海神に願う 志摩半島の海女祭 - 祈り、魔除け-』海の博物館、24頁。)
- (10)石経おらしの祭典は、志摩市阿児町志島で3月18日に行われる。小石に般若心経の文字を書いて海に沈め、海上安全などを祈る行事である。海女が浜で拾い集めた小石に般若心経の文字、262字を一文字ずつ墨書した「石経」を西の浜へと持っていく。浜では海女が使う道具のひもや手ぬぐいの上に石経が置かれ、住職の読経に合わせて海女も手を合せる。その後、海女が浜から海に向かい、海上安全と豊漁を祈って石経を投げる。(引用 下村恵美・石原義剛 2014『海女、海神に願う 志摩半島の海女祭 - 祈り、魔除け-』海の博物館、35頁。)

## 参考文献

- ・安藤慶一郎 1980『東海 ムラの生活誌』中日新聞社
- ・林文 2010「現代日本人にとっての信仰の有無と宗教的な心—日本人の国民性調査と国際比較調査から—」統計数理 第58巻第1号 文部省統計数理研究所
- ・石井研士 2007『データブック現代日本人の宗教』新曜社
- ・石原義剛・前田憲司 2009『目で見る 鳥羽・志摩の海女』海の博物館
- ・小林利行 2019「日本人の宗教的意識や行動はどう変わったか ISSP 国際比較調査「宗教」・日本の結果から～」放送研究と調査 69 (4), NHK 放送研究所
- ・小谷みどり 2007「日常生活における宗教的行動と意識」ライフデザインレポート (179) 第一経済研究所ライフデザイン研究本部
- ・牧野由朗編 1994『志摩の漁村 愛知大学総合郷土研究所研究叢書9』名著出版
- ・宮崎賢太郎 2014『カクレキリシタンの実像 日本人のキリスト教理解と受容』吉川弘文館
- ・野村史隆 1978「国崎の年中行事」『海の博物館・年報』財団法人水産科学協会
- ・酒井美代 2011『国崎の生活・郷土の迷信と方言の調』国崎町内会
- ・櫻井罔郎 2003「日本人の宗教観と祖先崇拜の構造」キリストと世界 (13) 東京基督大学紀要
- ・下村恵美・石原義剛 2014『海女、海神に願う 志摩半島の海女祭—祈り、魔除け—』海の博物館
- ・山本茂紀・山本和子 2013『海女の調査報告集』太陽出版